

# 噫天才佐々木哲夫君

信神の一友 大條虎介

惜哉君もさうく死んだ僕が君を始めて知たのは去る大正六年の春一日偶然僕を尋ねて来た顔色蒼白沈鬱な一青年振魂を教へてくれさいふ教へてやつたがはかくしくやりそうにもない只時々来ては頼りに理窟をいふカラオモシロクナイ青小僧と思ふて、或時不圖した事から僕は君に鋭突を喰はした「僕は君のやうに馬理窟ばかり並べて實行の伴はない人は大嫌ひだ」と二三日經て君は長い手紙を書て来て僕の留守宅に投げ付けて行た「先生は私を嫌ひださいふが私も先生を嫌ひだ」とさんく此間の仇を討てよこした僕は自己の短所悪所を教へられて不思議に悪感か起らなかつたあゝ如何にもそうだ／＼と數日經て君は又僕の處へやつて来た今度は手習を教へるさいふ手本など持て行て手習を始めた其後度々やつて来た後思ふまゝ之は君が「僕」を研究する方便であつたらしい（勿論消閑の具、養心の具としてのそれも目的の一であつたらうけれど）普通の人間なら互の悪口で物別れをしたら先づはそれきり絶縁するのが當り前であらうのに彈力に富んだ研究心の強い君は一過で僕を捨てずに更に別の方面からやつて来た君はやつぱり研究家であつた

世人が殆んど絶望の眼を以て見たりし君が死中に活を得て人世の行路に一新生面を打開し而かも光輝ある生涯を開拓せしは實に大正六年氷上山に於ける夏の禊を以てその動機となすべしに似たり君が

感想の記は之を證して餘りありません歟

父母の健康がすぐれなかつた爲か僕は生れ落るさから弱かつたらしい今でも記憶して居るが小學校時代には心臟が悪いといつてよく鐵くさい茶を飲ませられたものだ高等小學校を卒業する頃から自分でこれではいかんといふ氣がついて冷水摩擦や深呼吸をやり出したので幾分健康を増進したやうであつた

師範實校に入學してもやはり體育に力を盡したので段々よくなつて来たがあまり調子に乗て柔道の寒稽古に出席した爲め遂に身體の具合を損じ永い間呼吸器病の爲めに苦しまねばならなかつたその後僕はこんなことを考へるやうになつた「僕は元來弱いのであるそれ故すべての事を人並にやるべきがよくない僕は僕に適當な事丈やつて居る方がよいのだ」

こんなことで僕は太極先生について振魂を教はつても極く一寸の間十分が十五分位しかやらなかつた然しこれが幾分具合がよかつたし其後雜誌で見たり話で聞たりして禊がよいといふことを知つたので是非一度はやつて見たいと思つて居た

それでも例の元來弱いさいふ氣があつたので本部に行てしつかりやらなければだめだらうと思つて居たが此の夏大條先生が可なり多數の同志を集めて高田でやるさいふことを開たので兎も角も參加することにした

來てやつて見ると一日二日の間は鼻が塞つたり咽喉がつぶれたり胸が激しく痛んだりして大部悔まされたが三日目の午後から非常に樂になつた

四日目に中日の御馳走として與へられたお萩餅を喰てからは元氣

四倍し何もなく愉快でたまらなくなり「僕は元來弱いのである」といふ様な氣などはどつかに飛んでしまつた。これで見ると形式さへ知つて居れば——最初の苦痛に打勝つ爲めに群衆の必要があるとしても——全く何處でやつても同じ結果を得るものらしい。此の行は外部から見れば随分無理なやうで餘程苦しうに見ゆるが實際やつて見ると非常に樂である。終日終夜ちつとも斷食して居る様な氣がしない。唯心の底の底から湧上る愉快と感謝の念まで一杯である。

僕も始めて普通の人と競争し得る健康を贏ち得たので愉快でくたまらない。此の七日間の修行は僕にかく丈夫な身體を與へたのみでなく精神的にも又更に大なるものを握らしめた。僕は元來懷疑の人ではない。もりだ自分丈けでは人並以上の信仰を以つて居る心算で居た。然し今になつて見ると僕の信仰は方便的のものであつて極めて薄淺なものだつた。然し極く淺薄なものだつたけれども精神的の或感應を得た。今になつて見ると信仰といふものは心の慰安を得る丈けのものである。といふやうな以前の考は全くつまらないものである。眞の信仰は更に其上に肉體を安全に擁護し身體に強い、意氣を賦與するものでなければならぬ。即ち精神と身體とが異つたものでないといふことを切實に感得したのである。

僕は此の兩方面に於て深く、大條先生並に天地八百萬神に感謝するものである。

一回の禊に依て復活更生の端緒を得し君に僕は更に冬の禊を勧めた。翌大正七年一月廣田に於ける寒中大海禊に於て君は實に熱心に猛烈に修行した感想の記に曰く

僕が禊をやつたのは今度で四回目である。

昨年夏初めて氷上山麓でやつて其効果を體驗してから僕の身心はまるで改造された。その効果のいかにも著しい。これに對するあこがれの情の抑へがたい。との爲めに九月には自分丈けで十一月には五人の同行者と一所に秋の禊を修めた。そして益々その効果の大なるを感じ。今度の禊にも友人を説きすゝめて大意氣込で參加したのである。今度の禊の分まで特別に言ふ事は別ないが更に角感想を書いて見よう。

僕が禊をやつて見る氣になつた動機は身體が弱いためであつた。それで若し幾分でも健康が増進したならそれで禊の効果も充分認められた譯である。がそれをやつて見ると自分の望んで居たことが達せられたのは勿論全く豫期しなかつた。然かも今考へて見るとこれの方が遙に重大であると思はれる。或物を得たので今は全く喜びに溢れて居る。

今僕の體得した効果を少し具體的に述べて見ると第一に健康上では消化機の活動の非常に旺盛になつた。ことである。以前は毎日又は隔日位に必ず何等かの消化劑を用ひなければ直に具合を損じたものである。が此夏の修禊後未だ只一服の藥さへも用ひない。勿論あまり多食すれば一寸は苦しくなるが一日位もたつとすぐ恢復する。それで全身の健康状態の良好になつた。これは非常なもので。此秋は體重も今迄に見ない程増した。

僕の虚弱な原因は呼吸器の弱い爲めであつたのだがそれがもう今では非常に丈夫になつた。今日此頃のやうな寒風の中になつてもちつとも何さもない寒さであろうが塵芥の中であろうが決して恐れはしなくなつたのである。咽喉が強くなつて聲のよくなつたのも又

非常な獲物である

次に僕の豫期しなかつた精神的方面では第一に心に落着きが出て來た事である以前は一寸の事にいら／＼して外には發しなくとも始終不満が心の中に蟻つて居り友人などの動作でも一寸した事が非常に氣になりすべてのものが氣に喰はなかつたものであるが此頃の狀態はまるで反對である友人に對してもホントの憤しみの情で突ることが出来るし何に對しても感謝の念を以て接することが出来るやうになつた

元來僕は人生に對して一種の反感を持つて居た世の中の人々は自分等の爲めにいゝ事をやろうとする者にさへも決して好意を示さな<sup>い</sup>皆御互に猜疑の眼を投げ合ひ他人を互に陥害の中に入れようとなせて居るこんな世の中の爲めに自分一身を犠牲にするのはつまらない事である自分は自分の爲めに自分の事をやりな<sup>ら</sup>ばよく社會と没交渉で居たい唯その事が社會の爲めになるならばそれは大いに望ましい事ではあるが兎に角自分は自分丈けに生きたいといふのであつた

處が今迄最も卑しいものと思つて居た然かもその實は最高尙な最尊重すべき「情」が其本來の姿其の儘に發顯し成育した結果としてこんな様な偏風な利己的な考が全く跡を斷つてしまつたとして「感謝」といふ字の眞の意味が全く了解されたのは實に何よりも嬉しいかくて君の身心は茲に全然改造されたり師範學校卒業後何年かの間奉職出來ずに休て居る君は此年の春縣の體格検査に及第して隣村の横田の小學校に教鞭を執るの身とはなり蛟龍遂に池中の物に非ず在職一年翌大正八年四月京都帝國大學天文臺の人として一躍世界の學界に名を馳すとき日本の「天文學者」なりぬ君が赴任の途東京にて稜の本山たる稜威會に川西先生を訪ひし消息に言く  
東京にて川西先生に面會致し候先生は非常に喜び熱心に小生の天文雜話を聞き居り候いつかこういふ人を神様が下さるに相違ないと思ふて非常に待つて居つたごうも有り難い事じやさいふて非常に喜び居り候

其後の消息に曰く

御せの如く小生は全く幸福に候殊に小生は當地に來りて表記の處へ下宿を定め得たるを最も幸福と思ひ居り候所は大學生門より東の方へ三町位のものにて六七分にて研究室へ到着し得るのみならずその附近に吉田山といふ山あり中腹に宮幣大社吉田神社を祀り居り候即ち小生の幸福なる所以は該社の境内に最も適當なる振魂の場所を發見せる事にて朝必ず五時半起床水道の水を浴びて稜の民性のやりつら行けば丁度七分にて其場所まで達し候しかも京都があつただけ全く静寂に少しも騷亂されず三十分の振魂をやり得るは實に愉快に候六月一日より引つゞきやり居り候が大暴風雨ならざる限りは行ひ得る場所に候さすがに雄詰雄願、時は振返り見る人も之あり候へども京都は一般に敬神の念盛なる様に候  
英彦山に於ける同年夏の稜には君はわざ／＼出かけて行たその時のハガキ(門司發)

昨夜は感想談があり今日は終禊祭で下山して今此處に一泊して居ます  
橋本中將と豊津の中學校長とのきまりきつた困苦缺乏がどうの充氣の振興がどうのさいふ感想談のち京大さいふ屑書にひかれたのでせう幹部の指名によつて私がいかりました

奥村の果から來て恥しは私まじくないけれども前提して身の上話から八回の稜の經驗を話さし時々熱烈な拍手が起り今日下山する途中など橋本中將まで昨夜は大變にいゝ御話を承りまして私も信仰が深くなつたうやな氣がしますと言ひます幹部の人は是非又來いと言ひました川西先生も喜んで熊本へ行かれました  
十一月十日附のハガキに曰く

いつか見付からぬことはあるまい且つ天に親むためにもよからうと彗星探しを始めたのは九月になつてからです百時間位も探したら一つ位は見付かる心算でしたが正味十二三時間で一つ發見したのですよほど運のいゝ事です運がいゝと言へば此の頃私の周囲に

は運のいゝ事ばかりつゞきます來てから三ヶ月たゝぬに助手にせられたり弟が唯一回で文檢に合格したり今日は又停車場前で御即位禮記念の金メダルを拾ひました勿論すぐ警察へ届けては來ましたけれども運のいゝ事は少しもその爲めに害せられませぬ殊に今度の彗星發見などは幸運の極上でせう電報を打ちましたから永久に名が残るかどうかは未詳としても世界的に私の名がひろまつたことにはなつたのです

こんなさら恐ろしいようなトン／＼拍手の幸運も自分自身が作つたものだ川西先生流に言へば神としての自分自身が發展した結果であるさ自覺し得るか故に殊に私は幸福であります天地に感謝し自分の道を迷はぬ事が出來ます

昨大正九年三月二十六日附の手紙

小包有難く拜受致しました

珍らしい鳥ではないかも知れませんが兎に角正直を申すさ名前を知らぬ鳥ですがその鳥の繪を頂いたのは殊に何よりも有難く御禮申ますペン軸を握る指先にたこが出来て永久に凹むやうになる迄ペンを握りづめにして字の形も區別し得ないやうにまるで文字を破壊しながらヤツキさなつて講義を筆記し試験でござるさて欠伸さ居眠りミチヤンゴンにノートをひつくり返してさまかくも濟ました心算でアアアといつてるさ小包の中から此の鳥が出て來たのです

早速にピンではいで眺めて見るさアアと思つたら凍つて居た鶯の涙がこけて一時に梅の花が咲いたやうでした手足が急に延びて陰鬱の氣一時に去るといつた按梅ですこりやいゝこんなこせ／＼し

たことより僕も手習でもゆつくりやりたいなと思ひました包んだ

反古の薄墨の上を二度も三度もなで、見ましたそして此の鳥を表装して僕の室に吊るしてやるうと思ひました豪放な泰山木の真中に全體の焦點を握つてちよいとさまつたこの鳥は實に好い感を興へます神經衰弱はこの繪を見たなら治りそうですれ感胃さ戦ひながらあまりくる／＼まわりをしたためか三月中旬つまり試験の頃はごうも身體がほんごでありませんでしたしかじ正直なもので何も彼も放りばなして遊んだら二三日の内に全くもこの元氣になり體重もすぐ増して來ました四月の四五日頃迄は休みだそうですから保養しようと思つて居ます(體重が減じたさきでも十三貫九百目以下にはなりませんでした昨夏は十四貫二百五十目ありました)何にせよ少しも心配して居ないし、又自分ながら感心する程いろ／＼働きました春になつたので殊に氣持がよくりました熊谷鬼堂さんから雜誌を頂いたげども御禮もしませんでしたよろしく御願申ます さようなら

これは京都から貰つた最終の手紙だその少し前三月十七日附のハガキの一節に曰く

近頃痛快は事は可成り熱があつたらしいほどの大風邪を大雪の朝でも冷水浴さ拜神さを騒さずに退治してしまつたことですそれで三週間以上湯に入りませんでした

嗚呼痛ましい哉君は得意の經頂に達し熾烈なる智識慾に驅られて餘りに身心を酷使しその調和を破つたのである一度遠く退却せし病魔の軍勢は此處に乗じて捲土重來せし西哲ゲーテが長生の秘訣として「田舎に住居して希望を小にし」てふ一句をその筆頭に掲げしもげ

にこそはりや七月下旬僕は君を病床上の人として再び君が家に見し  
こそ返すべくも遺憾なれ

三月に起つた病氣を六月になつて始めて醫者に見て貰ふたさといふ  
程君は一面容氣な人間になつて居たのだ病勢も左程劇しくも見へず  
精神は此の如く悠々として居る静養したらやがてだんくよくなる  
であらうと思はれた

悲哉想像は當らなかつた病勢は次第に強くなつた恰も大軍の  
曠野を壓するが如く静かに力強く進て来る人間の力醫術の能力  
は此に到て何等の權威なきものとなつた大正十年二月二十二日の夜  
地上に萬斛の憾を残して英魂遠く天界に飛び去つた

君は既に信仰の人である一面に於て周到の注意を以て治療に従事  
し人力の限りを盡して病の平癒を希圖せしも一面に於ては神を信じ  
命に安し悠々迫らざる眞に敬服に餘りあり君の釋中に在るや看護は  
偏に慈母の任なりき君は言ふ「私が容子が悪いとおつ母さんはすぐ心  
配して元氣がなくなるから私が氣合をかけてやります」と(氣合動  
作は禊修行の一にして之を雄健雄詰といふ)母さんは君を看護し君  
は母さんを看護した

病は愈進て遂に腦を浸すに至つた意識は朦朧として殆んど病苦を  
知らざるものゝ如し慈親は寧ろ臨終の苦惱なきを喜ばれたりし死に  
臨んで大聲誦の名を唱へし是れ君が生涯の勝関かいとも尊き事にぞ  
ありける

嗚呼魂魄去て今何れの處にか迷ふらんそは十萬億の西方淨土には  
あらで君が発見せしてふそが彗星の邊りにやあらん(南無)

(大正十、三、十三、稿)

## 佐々木哲夫君の思出

熊谷 鬼堂

佐々木哲夫君は大正四年三月に岩手縣の師範を卒業した。師範學  
校に在學してゐる頃からどこか他の生徒とは異つたタイプを備へて  
ゐた。肩をそびやかして大道を闊歩する所謂學生氣取をする方でも  
なかつたし、餅屋やそば屋を馳けまはつて青年らしい野次性を發揮  
する方でもなかつた。駄洒落言つたり、帽子を横丁に被る方では無  
論なかつた。さうかき云つて別に君子氣取をしたり、傲慢面する方  
でもない。實際は廣く求めないが深い方で、しつくり心の會ふ友を  
得て深く純に交る方の人であつた様だ。従て、豪傑風に粗雑に廣く  
誰さも交際はするが眞に會心の友のないといふ、所謂實際家さは自  
らその選を異にしてゐた。他の學生が餅屋にかけ込んだり帽子横丁  
に大道を闊歩する時には、圖書室に這入つて専心讀書するが、ひさ  
り郊外を散歩して思ふ様自然の大氣に侵るさういふ様であつた。佐々  
木君は多くの場合ヒトリ居る方が多かつた様に今思ひ出される。然  
し少しも徒然ださか退屈ださか思ふ顔附などはしなかつた。常に忙  
しさうに生きるといふいろいろの研究を續けてゐた。眞理の研究は彼  
の唯一の慰籍であつた様だ。彼は天性稟者の素質を多分に持つてゐ  
たつたのだらう。そこに彼れをしてヒトリ居らしむる原因があり又  
ヒトリゐて徒然も退屈も感じさせないところがあるのだ。